

経管栄養・血圧測定・ボディメカニズムの盲点

神戸市立看護大学短期大学部 平田 雅子

血圧測定は、非常に基本的な看護技術の一つであるが、書物によってその測定方法に違いが見られたり、根拠が記載されていないために、自信をもてない…という言葉を目にするところがある。

今回、実演交流会が設けられ、自由に交流をもちながら「すぐに役立つ正しい臨床技術」をそれぞれ論じることになっている。ここでは、

- ・血圧は何の圧力か？
- ・一般に上腕動脈で測定する理由は？
- ・血圧計の高さが心臓と同じ高さでなくてもよい理由は？
- ・体位と血圧の関係は？
- ・マンシェットの緩みや巾に対する考え方とその根拠は？
- ・血圧測定場所による補正の仕方とその根拠は？ など

自由な交流をもちながら、基本的なところから進めたいと考えている。

また、時間に余裕があれば、「経管栄養」における盲点についても述べたい。

これも日常よく行われる看護技術であるが、時として患者に苦痛をもたらす。なかでも低温刺激による下痢は少なくないので、研究テーマにも取り上げられることが多いが、「加温」や「湯煎」が概念的に扱われており、それに伴う実験データが十分ではない。

「どうすれば栄養物の適温保持ができるのか？その理由は何か？」の全てを論じる時間的余裕は無いが、適温保持を妨げる原因の一つである「粘性（粘稠度）」については、話したいと思う。

略歴：1963年大阪大学理学部物理学科卒業

1965年大学院理学研究科修士課程修了 1968年同博士課程修了

1969～70年米国ボストンカレッジ Post Doctoral Research Associate として勤務

1981年神戸市立看護短期大学 助教授 1987年同教授

1996年神戸市看護大学短期大学部 教授